



238号

2018 / 11 / 1

日中文化交流市民サークル‘わんりい’

〒195-0055 町田市三輪緑山2-18-19 寺西方

☎044-986-4195

<http://wanli-san.com/>

Eメール:t_taizan@yahoo.co.jp



成都のウサギ焼き肉屋(火鍋手撕兔) 四川省成都是若者で活気に満ちている。夜になると、飲食店はどこも大賑わい。明るい照明につられて覗いた店はウサギの焼肉屋、お持ち帰りの店だった。通りに面してガラス越しに炎の列がすごい。ウサギ肉は普通に食べられているのか。 (2018年7月、四川省成都にて 佐々木健之撮影)

三国時代、蜀の国の皇帝劉備は、丞相の諸葛亮を非常に尊敬し信頼を寄せていました。

劉備は、臨終の時、息子劉禪が国を上手く治められるように、助けてやって欲しいと諸葛亮に頼み、且つ私心をはさまないで誠意をもって言いました：「息子は平凡な人間なので、皇帝としてやっていくには、おまえの助けが是非必要だ。どうか息子を助けて、良い皇帝にしてやってくれ。若し、息子が指導に従わなかったら、皇帝を辞めさせて、おまえ自身が皇帝になって国を治めて欲しい。私は、息子が国をダメにするのだけは避けたいと思うのだ」と言いました。

劉備の死後、諸葛亮は全力を尽くして、劉禪が国を治めるのを助けました。



言葉の意味：开(開)=打ち出す、持ち出す。誠=真心を込めた、誠意。布=公表する、表す。公=公平である、私心の無い。

使用例：意見の違があったが、皆で胸襟を開いて自分の考えを表明し、話し合ったので、意見の違いを解消する良い方法を見つけ出すことができた。



中国語は簡潔で良いですね。たったこの四文字で、日本語にすると「私心をはさまず誠意を尽くす」という意味になります。他にも、「胸襟を開いて真実を語る」とか、「虚心坦懐に心の中を述べる」とかいう意味にも使えます。

この言葉は、《三国志演義》の中に出て来る四字成語なので、《三国志演義》の愛読者たちは、この言葉を見ると、上のお話の場面を連想し、劉備の心を思い、諸葛亮の心境を察して、更には歴史の流れを思い起こすことができるのです。多くの人に感銘を与えるこの物語、しかしながら完全な史実ではないそうです。

日本では、《三国志演義》として親しまれている物語の原型は、北宋の時代には既に出来上がり、様々な題名の本が存在しましたが、中国では、現在《三国演義》という呼び名に統一されたそうです。人々は、遠い三国時代の英雄の話が好きなので、講釈師が街角で面白おかしく話して聞かせていた種本が沢山あり、それらの話を集めて整理して作り上げた歴史小説が《三国志演義》(ここでは、日本で親しまれた名称を使用しましょう)なのです。

《三国志演義》が出来上がったのは、元末明初で、作者は羅貫中といわれています。羅貫中は、たくさん出回っていた講釈師の話の中から、荒唐無稽な話や、史

実に合わない話を取り除き、更に漢王朝の末裔と称した劉備とその一党を善、曹操の陣営を悪と予め設定して話を整理し、物語を作り上げました。

昔から、《三国志演義》は、「実七虚三」といわれていますが、歴史を踏まえて、魅力的なお話が語られ、優れた読み物になっているのです。史実を逸脱しない範囲で、一つ一つの物語が、人々の共感を得られるような筋立てで人気を博しました。



満柏氏画

元朝は征服王朝で、漢族文化人の政治的な活躍の場が極端に狭められたので、文化人の多くは芸術の世界に活路を求め、元代から明初にかけて、多くの戯曲や「四大奇書」といわれる優れた小説が出現したのでした。

「四大奇書」とは、《三国志演義》・《水滸伝》・《西遊記》・《金瓶梅》をあげるのが一般的ですが、中でも《三国志演義》は出色のできれば、四字成語の宝庫でもあります。

そして中国では、こんな幼い時から、《三国志演義》の中の四字成語を教えるのですね。

Shì zhě rú sī fū
逝者如斯夫

逝く者は斯くの如きか〈子罕第九〉

うえだ あつ お
桜美林大学名誉教授 / 孔子学院講師 植田渥雄

『論語』という書物は、一定の主張を順序だてて述べたものではなく、孔子やその弟子たちの言わば片言隻語を寄せ集めたものです。したがって、どういう状況で、どういう意図をもって語られたものか、必ずしもはっきりしません。そこから生じるのは、解釈の多様性です。過去二千年来、実に多くの人たちがこれに注釈を加えてきましたが、その解釈は人によって、また時代によって大きく異なります。その顕著な例を一つだけ取り上げてみましょう。

「子在川上曰：『逝者如斯夫！不舍昼夜』(Zǐ zài chuān shàng yuē: Shì zhě rú sī fū! Bù shě zhòu yè)」(子、川上せんじょうに在りて曰く「逝く者ゆは斯くかの如きか。昼夜ちゅうやを舍おかず」)〈子罕第九〉。孔子は川のほとりに立って言いました。歲月はこの川の流れのように去って行くのかなあ。昼も夜も留まることなく、と。「川上」とは川のほとりのことです。「逝」は行くという意味ですが、多くの場合、永遠に帰らないという意味に使います。「夫」は強めの助詞です。「舍」は「捨」と同じで、そのままに捨て置くという意味です。したがって「不舍」とは、そのままにして置かない、つまり絶えず流動してやまない、ということになります。孔子の言葉はこれだけです。前後の脈絡は全くありません。

孔子が川の流れを見て、いつになく強く心を動かされ、深い感慨を催したことは間違いありませんが、その感慨の内容については、何も語っていません。多用な解釈が生まれる所以はここにあります。

先ず魏晋南北朝時代の代表的な解釈を見ますと、次のようになっています。

①人は永遠に生きるわけではない。たとえ大きな

功績をあげたとしても、あつという間に時は過ぎ去ってしまう。この点については孔子も一般人も同じこと。川の流れに臨んで深い感慨を催すのは当然である。

②孔子は高い理想を掲げ、乱れた社会を正すために力を注いできたが、社会は一向に良くなならないまま、時は徒に過ぎていく。孔子はこの現状を嘆いている。

前者は世の無常を嘆いたもの、後者は世直しの困難さを嘆いたもの、ということが出来ますが、両者に共通するキーワードは「嘆き」です。日本では古くから「川上せんじょう之嘆」という四字熟語で親しまれてきました。ただ、孔子の思想に「無常観」はそぐわないと考える人も多いのではないのでしょうか。その点では、後者の方が納得しやすいようにも思われます。

さらにもう一つ、それは次のようなものです。

万物は絶え間なく変化し、止まることがない。これこそが宇宙の根本原理である。この原理は深遠なもので、なかなか理解しにくいですが、川の流れを眺めることによって、誰しも容易に身に感じ取ることができる。人は皆、特に学問に志す者は、この原理にのっとり、日夜奮励努力しなければならぬ。孔子は川の流れに譬えて、このように勤勉の尊さを教えている。これは宋代に流行した解釈です。いわゆる朱子学は、このような解釈がもとになっています。

以上三つの解釈のうちどれが正しいでしょうか。このほかにも多様な解釈が可能ですが、その答えは読む人の心の中に在るはずで

(わんりい「中国語で読む漢詩の会」講師)

大明寺を後にして、バスに乗り込み个園に向かう。ほんの5～6分の近さだ。个園は揚州随一の名園と言われており、中国十大名園の一つでもある。名前にある「个」は竹の象形文字で、中国語を学んだ方はご存知であるが一個二個と物を数える時に使う文字である。特に石でできた「四季の景」が有名である。これは四季の風景を表現したものでその設計思想は次の通りである。

〈春の景〉は、色気があって美しく微笑んでいるかのように。〈夏の景〉は、濃い緑で雫が垂れるよう。〈秋の景〉は、化粧をしたように明るく美しく。〈冬の景〉は、眠ったように薄暗い。——とネットに出ているが凡人にはよくわからない。个園の一角に住居がいくつつかある場所がある。この庭園の持ち主は「黄応泰」という方でその一族が住んでいるとのこと。个園と命名したのは、「竹は〈堅固〉であり、かつ〈直〉であり、人間の心構えにも通ずるものだ」という考えからだそうである。

前号に書いたように、清代(1644年～1911年)に塩の流通で財を成した大富豪は庭園造りに励み、文化の隆盛に多大なる貢献をしたが、度重なる戦火で个園の他わずかな庭園を除き殆ど焼失した。誠に残念である。残っていれば蘇州に引けを取らない町になっていたであろう。蘇州は殆どが明代(1368年～1644年)に造られており、蘇州と揚州はそれぞれの時代を代表する街になっていたはずである。

次に紹介する「東関街」も清代の街並みを復元したものである。个園の黄家の軒先に沿って歩いて行くと、小さな門がありそれを潜り抜けると何とそこは東関街であった。何か裏木戸を潜った印象である。東関街とは、清代の揚州の商業の中心地であった地域を再現した全長1122メートルの通りで、最近観光地として整備されたものである。中国は戦乱や近年の経済発展で消失しつつある歴史的な街並みを保護しようとしているが、その一環である。東端の東門はかつての揚州城の城門の一つである。通りの両

側にはあらゆる店が立ち並んでいる。伝統的なお菓子屋、酒屋、扇子・剪紙・陶器・掛け軸などの専門店、粽子などの食べ物店と見るだけでも楽しい通りだ。土産物店に比較的に多いのが揚州名物の、「三把刀」を売るお店である。ここ揚州は古来刃物生産の盛んな土地であったと言う。三把刀とは、①包丁、②各種ハサミ、③修脚用道具、である。修脚とは、足の裏の角質化した皮膚や手や足の爪などを薄く削る道具である。セットでもバラでも売っている。これらに対する職業は、当然包丁はコック、ハサミは床屋や洋服の仕立て屋である。そうした職業には揚州には秀でた人が多いそうである。修脚用道具は、日本でも中国でも流行りのネイルサロンで重宝されそうだが、如何であろうか？

ここで揚州のいろいろな文化について紹介したい。そのなかで揚劇、書画、盆景(盆栽)、料理について書いていきたい。

〈揚劇〉

揚劇は、京劇や越劇(浙江省)、川劇(四川省)などの各地にある戯曲の一つである。江蘇省の揚州や鎮江などこのあたり一帯の地方劇である。「白蛇伝」などの演目は当然あるが、代表的な曲牌(元、明以降の曲調をいう)は、「梳粧台(化粧台のこと)」と出ているがまだ見たことがないので説明はできない。揚劇はいつのころから行われているのか定かではない



復元された清代街並み「東関街」



5都市とグルメ×5日間」のツアーだけに、毎日豊富多彩な料理が出た。

が、2006年に「国家級非物質文化遺産」(国の無形文化遺産のこと)に登録されている。中国は各地で伝統芸能が盛んである。昨年10月に四川省の宜賓市に行った時、広場で「李庄草龍舞」に出くわしたことがある。この舞は「四川省非物質文化遺産」に指定されているとのことであった。

〈書画〉

書画と言えば、「揚州八怪」である。揚州八怪とは、清朝の乾隆帝の時代に現れた揚州を代表する一群の文人画家をいう。八怪は、「金農」など八人の著名な画家であるが、八人が誰を指すのか諸説ある。「怪」という文字を使っているのは、当時の伝統的な画法に比べ斬新で奇異な感じがすることからのネーミングらしい。八怪の画家たちは自由奔放で個性的だったため中国画壇に新風を吹き込んだ。共通の画風はないがとりわけ花鳥画に優れ四君子と言われる〈梅〉、〈蘭〉、〈竹〉、〈菊〉を好んで描いた。なぜ一度も都でなかった揚州の地に書画の文化が開いたかという、既述したように巨万の富を持った塩商人などが、競うように樓閣庭園を築き、樓閣に掲げる書画を求めたのである。このため各地から文人墨客が雲集してきたのだ。四君子については、過去に書いたことがあるが、要は上記の四つの草木は以下に書いたように君子のあるべき姿をよく表しているというのである。

蘭:「清逸」

優雅な姿態と高貴な香りを持ち、清らかなイメージである。季節は春。

竹:「節操」

真っすぐ伸びる姿は「純粹で正直な品格」、節は「屈しない節操」、空洞は「謙虚な精神」を表す。季節は夏。
菊:「淡泊」

晩秋に咲き始める。寒い西風をものともせず、瑞々しい香りを放ち、静かに美しく咲く。季節は秋。

梅:「高潔」

寒さに負けず風雪の中でも凛々しく開花する。孤高で人に迎合しない品格を持つ。季節は冬。

国のトップに立つ人は、このような人物であって欲しいものだ。なお八怪が四君子をよく描くわけは、基本的な筆遣いを全て学べるからだそうである。

〈盆景〉

盆景とは盆栽のことだ。「揚派盆景」は中国五大流派の一つで唐の時代(618年～907年)に起源を持つと言う。近年盆栽が海外で注目を集め、英語では「BONSAI」と呼ばれているそうであるからてっきり盆栽は日本が起源かと思っていたがそうではなかった。唐の時代に行われていたものが平安時代に日本に来て始まったとある。能には「鉢木」の演目があるが鎌倉時代には武士階級の趣味として広く普及していたらしい。ネットの写真で見る限り、両国の盆栽は同じように見えるが如何であろうか? そういえば(その1)で南通市の濠河風景区に「南通盆景園」があると紹介したが、やはりいつかこの目で見てみたい。

〈料理〉

料理でまず思い浮かべるのは、チャーハンである。揚州料理はあっさりとした味付けだそう。上海料理も同じような味付けと思うが、原点は揚州にあるそう。その昔チャーハンといえばご飯と卵を炒めたシンプルな料理であったが、揚州で様々な具材を混ぜた「五目チャーハン」を作り出した。もう一つは、「揚州獅子頭」という肉団子料理である。友人によると中国人は揚州と言えば揚州チャーハンよりこの揚州獅子頭を思い浮かべると言う。ネギ、ショウガなどを練りこんだ挽肉をこぶし大にして弱火で長時間加熱して作るという伝統的な料理である。今回の旅でどこかで出たのかもしれないが気が付かなかったのが残念であった。

2回に分けて揚州を書いたが、次号は「鎮江」について紹介したい。

(続く)

東西文明の比較 (29)

▼「聖徳太子」の一断代▲

陽光新聞社・顧問

塩澤宏宣

「聖徳太子」、または「厩戸皇子」について述べるには、あまりにも知識が少ない私です。しかし、この連載(東西文明の比較)を続けるためには、どうしても触れないわけにはいきません。色々ご批判を受けられることを承知の上で、その一断面を記そうと思います。

🏛️ フェノロサが描く「聖徳太子」

明治政府によって興された「歴史と文化の創造運動」が、ひとつの原点です。政府によって招聘されたアメリカ人のフェノロサ(1853～1908)や岡倉天心等が中心になった「古美術」調査が行

われました。その中心は法隆寺でしたが、近隣の中宮寺・法輪寺・法起寺なども含まれました。その調査手法は、西欧流の科学的手法が用いられた日本最古の調査で、現代にも通じるものでした。

フェノロサの遺稿「東洋美術史綱」にある「聖徳太子」を飾る言葉を列挙してみましよう。

「推古朝の芸術家」

「東アジアの賢聖に伍するほどに非凡の才能」

「仏教のコンスタンティヌス大帝」

「あらゆる改革の中心人物」

「中国の梁の武帝以上の存在」

そして「若い太子」などです。

併せて「聖徳太子」の時代に対しても、その評価は尋常ではありません。

「日本の最も成長すべき青年時代」

「日本の最初の文化隆昌期」

イギリスのエリザベス朝やビクトリア朝の呼称に倣って、

「推古朝」

「推古時代に前途洋々たるすべりだしをみた若い日本美術」

「最初の日本固有の美術様式は推古様式」

等と賛辞を惜しみません。要するに、「最初」「青年」「成長」「若い」と感じ取って、それを「推古時代」と名付けたのです。そして、それを推進したのが「聖徳太子」であるとなりました。

🏛️ 仏教のコンスタンティヌス大帝

フェノロサがコンスタンティヌス大帝と「聖徳太子」を比較したのは理由があります。

コンスタンティヌス大帝は、ローマを再統一し、東のコンスタンティノブルに首都を建設して、ギリシャの美術品を飾り、更に、これまで迫害されていたキリスト教を公認して、国教化の道を開いたと言われます。

一方、「聖徳太子」は、氏族間の紛争を収めて日本の統一を図ったと考えました。「憲法の起草」「冠位十二階制定」「遣隋使派遣」「史書編纂」などの業績を挙げています。更に斑鳩宮や法隆寺を建設して、外来性豊かな仏教美術を導入して、これまで迫害されてきた仏教の国教化を推進した指導者である、としました。フェノロサは、まさしく両者はそっくりだと言います。しかし、この両者比較で最も意識するのは、仏教の存在です。

「推古天皇と聖徳太子の最大の事業は、疑いもなく、仏教と仏教芸術を確固たる輝かしい基盤の上に据えたことである」と、フェノロサは明言しています。

🏛️ 一瞬輝いた「朝鮮美術」

フェノロサは、「聖徳太子」の時代について、朝鮮美術との関係を挙げています。例えば、「日本最高の木造建築、法隆寺」は朝鮮の寺院建築の例証であり、金堂の玉虫厨子と夢殿の救世観音像は、朝鮮人の力量を示す作品だと述べています。

この時期、推古天皇から全権を委任された「聖徳太子」は、朝鮮から学者・仏僧・建築家・木彫家・鑄造技師・塑工・左官・塗金工・瓦師・織工などを招聘することに全力を挙げました。自らも、これらの知識や技術を研究して、指揮・監督しました。その成果が、法隆寺や中宮寺などの伽藍や仏像・仏具に凝縮しています。「聖徳太子」のこのような熱意は、仏教の「国教化」が目的であったのでしょうか。なお、「聖徳の法号」を付され、僧侶の資格を得て仏教を

講義したとも言われています。

あまり知られていませんが、朝鮮美術は、「聖徳太子」の時代には一時的にせよ、中国や日本を凌ぐ時期があったとフェノロサは言います。朝鮮固有のものも見られますが、インド・ササン朝ペルシャ・バビロニア・ギリシャなどに起源を持つ様式が、漢以降の中国を経由して、仏教と共に推積され、短期的ではありますが朝鮮美術として結実したとみています。

「日本最初の偉大な傑作」釈迦三尊像

「聖徳太子」は、このような希有な朝鮮美術に遭遇しました。そして、これらの諸要素を学び、選択吸収して、「日本最初の偉大な創造活動」が出来ました。

法隆寺金堂の釈迦三尊像は、「聖徳太子」の指揮監督のもとで止利仏師が鑄造したのですが、西アジア・ギリシャ、そして中国の呉や朝鮮美術の要素を結合させて完成したものです。

フェノロサは、「独創的な制作」「日本という新しい国における最初の制作」「日本最初の偉大な傑作」であると驚嘆しています。ここで注目する点は、フェノロサの次の意見です。

「聖徳太子」による「推古様式」は、希有な時期の朝鮮美術とは太い関係を持ちながらも、一方では、世界のいずれの系列にも属さない「独創性」を持っていた、ということです。こうした傾向は、仏教の国教化に由来するものであり、ここに「俊敏な着想と精神の柔軟性」に基づく「島国民族の文明」が誕生した理由として挙げています。そして、その先導者として「聖徳太子」を指名しています。

「欧米の観客」としてのフェノロサを迎えた日本は、はじめて「世界の中の日本」を見つめることになったといえるでしょう。また、フェノロサも極東の端に、素晴らしい文化を持った日本を発見し、その創造者の中心が「聖徳太子」であったことを知り、感嘆したのです。

岡倉天心の「聖徳太子」

フェノロサと共に「歴史と文化の創造運動」の中心をなした岡倉天心は、「聖徳太子」をどのよ

うに見ていたのでしょうか。岡倉天心の「論」を端的に言えば、「唯心論」です。

欧米美術は、「精密・実物・器械・写生」を主体とした「唯物論」です。それに対する「唯心論」。

「形体」に拘束される「唯物論」は文明を滅ぼし、「精神」や「観念」が強鋭である「唯心論」は、文明を興す、というものです。「写生」や「実物」以外に「美」を認めるべきであり、「推古時代」の美術彫刻がまさにそれであると、述べているのです。

岡倉天心は、「仏教の哲理に基づき、唯物に反して唯心に傾けるにあるが如し」と語ったように、仏教の影響を認めていました。

天心は、「唯心論」の起源を中国に求めています。それは、漢・魏以降、六朝の仏教美術や文化に「東洋美術の原素」を見出し、その精神こそが唐の文化を生み、日本では「推古の盛時」を築いたと指摘します。「唐代」と「推古時代」とは兄弟関係で、時系列で見れば、「推古時代」が兄になります。なお岡倉天心は、日本は中国の美術や文化を直接受け入れたのであって、フェノロサとは異なり、朝鮮美術の存在を認めていません。

仏教派「厩戸皇子」

岡倉天心は、もし「厩戸皇子」や蘇我馬子らが、「敬心派」の物部守屋等に敗北していたら、その後の「日本美術は、その性質を異にしていた」と仮説を述べています。それほどに、仏教と美術の関係は、動かしがたい「事実」なのです。日本の美術は、仏教と共に興ったのは、「推古時代」であるから、「我が美術史は推古時代」に生まれた、換言すれば、それ以前には日本の美術史は存在していない、ということになります。そして「日本美術史」の生みの親が「厩戸皇子」と言うことになります。

「聖徳太子」論は、「絶賛論」から「存在否定論」まで、数え切れないほどの意見があります。その時の政治が、「聖徳太子」を利用してきたのは事実です。その「是非」は別として、そのような人物は、他にいないのではないのでしょうか。私としては、それぞれが、独自の「聖徳太子」論を持てば、日本の歴史が楽しくなると考えますが、如何でしょうか？

今回は蘇軾の「湖上に飲し、初め晴れて後雨降る」と、楊万里の「暁に浄慈寺を出づ」の二首を鑑賞しました。

蘇軾(1037～1101)は北宋時代、楊万里(1127～1206)は南宋時代に活躍した、いずれも宋代を代表する有名な詩人です。蘇軾は字を東坡(トンポー)と言います。中華料理にトンポーローという豚肉の角煮がありますが、蘇東坡がこのa料理を考案したことに因んでこの名前が付いたそうです。

22歳で科挙に合格、高級官僚となりますが、政治的には左遷に次ぐ左遷で恵まれない人生を送りました。一方、左遷のために各地を転々としたお陰で詩人としては素晴らしい作品を多数残しました。学者、書家としても有名です。また、左遷の先々で善政を施したこともよく知られています。特に左遷先の一つ、杭州は水害の多い土地でしたが、蘇軾が住民を動員して、沼地と化した西湖の湖底を浚渫し堤防を作らせ、一帯を肥沃な土地に変えたと伝えられています。それが後に中国随一の名勝地西湖となりました。西湖には今でも蘇軾が築いたと伝えられる「蘇堤」が残っています。

それはさておき「中国の文学は左遷のお陰と言っても過言ではないですね。」と植田先生。確かに中央に居続けたら、皇帝や他の官僚達との人間関係に戦々恐々として、自由な発想が生まれる余地はないように思います。左遷とはいえ、一度他郷の土を踏めば、初めて見る風景や新たな出逢いと別れに心を動かさざるを得ず、それこそが、文学が生まれる土壌なのでしょう。もちろん詩人としての才がなければどうにもなりません……。

さて、この詩の題名にある「湖上」とはその杭州の西湖です。「上有天堂、下有蘇杭」、つまり「天上に極楽あり、地上に蘇州、杭州あり」と言われた風光明媚なところ。その西湖に船を浮かべ、船の中で仲間を連れてお酒を飲んでいる、なんとも優雅な情景

です。初め晴れ渡って太陽の光が湖面にキラキラと輝いていたかと思うと、突然にぼんやりとした霞に包まれて雨が降りだした。「いやいや、雨もまた良し。晴れも雨もどちらも絶景、素晴らしいものだ」と、作者は謳い上げます。あるいは口にこそ出ませんが、西湖をこんなにも美しい景勝地にしたのは正にこの私、という自負があったのかもしれない。

ここでさらに思いは過去に飛び、かつて春秋時代、この地で激しくしのぎを削った呉越の戦いに及びます。そこで越から呉王夫差に送られ、呉王の心を奪い尽して越を勝利に導いた絶世の美女西子を思い浮かべます。「あの傾国の美女はきっと薄化粧でも厚化粧でもどちらも美しかったらなあ、西湖が晴れでも雨でも美しいのと同じように……」と。ここでいう西子とは西施のことです。

西施の名は『史記』や『春秋左伝』という由緒正しい歴史書には登場せず、戦国時代の『莊子』のほか、後漢の時代に作られた『呉越春秋』等の野史の類に盛んに現われます。実在の人物かどうかは分かりませんが、眉を顰めて憂いを浮かべると一層美しかったということです。当時、呉王の宮殿では宮女達が西施を真似て、悲しくもないのに眉を顰めた表情をするのが流行ったそうです。他人を真似たり手本にすることを「～の顰に倣う」というのはこの故事に由来しています。

この西湖と西施は切っても切れない縁でつながっていて、西湖は西子湖とも呼ばれるようです。この詩は遊び心と鮮やかな風景描写に歴史故事を絡めて、かつ平仄も押印も起承転結もバッチリ。最後の一文字は「宜」ですが、「ここまで来た時、蘇東坡も、してやったり!」と思ったでしょうね」と植田先生。植田先生ともなれば、詩人が詩を書き上げた時の心の内まで読めるのかなあ、と感嘆したのは私だけではなかったでしょう。ちなみに、この湖のことを「西子湖」と呼ぶようになったのはこの詩に由



杭州西湖蘇堤と周辺景色（百度百科から）

来するそうです。

さて、二首目は「暁に浄慈寺を出づ」。これも西湖を詠んだ非常に有名な作品だそうです。浄慈寺は、西湖周辺では靈隠寺と並び称される名刹です。その寺に宿泊して翌朝外に出た際、眼前に広がる西湖の風景を瞬時に捉えたものです。

先ず第一句は「何と言ってもやっぱり、西湖は六月が一番良い」と言い切っています。ここでの六月とは旧暦なので、七月のことになります。いわば夏の盛りです。西湖はいつ見ても美しいが、この時

期の景色は他の季節とは明らかに違う。蓮の葉が天の彼方にまで連なり、そこに朝陽をうけて映える蓮の花が格別に紅く美しい。果てしなく続く緑色と、そこそこに点在する紅色の対象が何とも言えない。

この詩は一瞬の風景を切り取り、恐らくかなり低い視点から、見たままに表現したもので、まるで絵か写真を見るようです。故事や謂れもなく、和歌や俳句に似た叙景的な作品に仕上がっています。「无穷碧」と「别样紅」の対句表現も見事です。

楊万里は剛直で情熱的、愛国的な政治家でもありましたが、詩風は日常的で、写実的です。き

ちっとしていて細かいところに味わいを見つける一方で、広大な風景も詠う。そんな特徴が見られます。日本人の感覚にはぴったりで、江戸時代の俳人たちにも愛誦されていたそうです。

楊万里は300年続いた宋の時代の中期、1126年に北方の女真族の侵攻により開封の都が陥落した翌年に生まれています。楊万里に限らず、この時代の詩人達の愛国精神は、そこから来ているようです。一方、都は杭州の地に移され、臨安と呼ばれて宋の臨時の都となりました。臨時といっても、この都の繁栄は、以後モンゴル族に滅ぼされるまで150年も続きます。これがいわゆる南宋です。これ以前の宋は後世、北宋と呼ばれるようになります。杭州が南宋の都になった後、西湖は皇族から庶民まで、共用の行楽地としてますます栄えました。南宋滅亡後この地を訪れたマルコポーロは、かの有名な『東方見聞録』で、杭州は世界で一番美しい都であったと称賛しています。戦わずして陥落した杭州には全盛期の繁栄の跡がそのまま残っていたようです。

yīn hú shàng chū qīng hòu yǔ
飲湖上初晴后雨
蘇軾

shuǐ guāng liàn yàn qīng fāng hào
水光潋滟晴方好
shān sè kōng mèng yǔ yì qí
山色空濛雨亦奇
yù bǎ xī hú bǐ xī zǐ
欲把西湖比西子
dàn zhuāng nóng mǒ zǒng xiāng yí
淡妆浓抹总相宜

こじょう いん は のちあめふ
湖上に飲し、初め晴れて後雨る
そしよく
蘇軾

すいこうれんえん は まさ よ
水光潋滟として晴れ方に好く
さんしよくうもう また き
山色空濛として雨も亦た奇なり
せいこ と せいし くら
西湖を把りて西子に比ぶれば
たんじょうのうまつ す あいよろ
淡粧濃抹総べて相宜し

xiǎo chū jìng cí sì
晓出净慈寺

yáng wàn lǐ
楊万里

bì jìng xī hú liù yuè zhōng
畢竟西湖六月中
fēng guāng bù yǔ sì shí tóng
风光不与四时同
jiē tiān lián yè wú qióng bì
接天莲叶无穷碧
yǐng rì hé huā bié yàng hóng
映日荷花别样红

あかつき じよじじ い
曉に浄慈寺を出づ

ようばんり
楊万里

ひつきょうせいこ ろくがつ うち
畢竟西湖は六月の中
ふうこうしじ
风光四時と同じからず
てんに接する蓮葉窮り無く碧にして
に映ずる荷花別様に紅なり

全般的に宋の時代は軍事が弱かったのですが、その反面、経済が大いに栄え、その繁栄は南宋にも引き継がれました。平清盛がそれに目をつけ、日宋貿易を盛んに行ったことは、テレビドラマ等でもよく知られるところです。

毎回このように植田先生は詩人と歴史的背景を詳しくお話し下さいますので、一同は意味を把握した上で、情景を思い浮かべながら、原文で朗読を繰り返し、作品を味わいます。

ところで、日本の知識人も明治中期くらいまでは、中国語の会話こそできませんでしたが、中国人と同じように漢文の読み書きができたばかりでなく、作詩もできました。西郷隆盛、大久保利通、高杉晋作、夏目漱石等は平仄も押韻も正しい漢詩を残しています。

しかし近代文学が興ると共に漢詩は次第に衰退していきま。漢詩の衰退は時代の流れとして仕方ないかもしれませんがね、いま両国の外交官が漢文の読み書きができて、漢詩を交えた外交ができた

ら素晴らしいでしょうね。」と植田先生。近代化による漢文の衰退は必然の流れだったかも知れませんが、今後はもう少し漢詩の力を盛り返しつつ、話せる会話もしていけたら、と中国語講師の私は思います。中国音による漢詩の朗読は、中国語の発音練習、特にリズム感の習得には最適です。それには、小学校から漢詩の時間が不可欠と常々思います。出来れば中国語読みで……。漢字で意味が通じあえる関係とは、考えてみれば世界広し、と雖も、日本と中国をにおいて他にないのでから。

さて、筆者アラフォー女子が、漢詩の世界に浸るとき、もはや中国人とか日本人とかの国籍や民族性、そして時代をも超越して、一人の人間としての作者の感情を味わえることに心踊るのです。

出来ることなら、避けて通りたい人生の悲しみや絶望などマイナスの感情も、「味わう」ということにおいては、喜びや幸せと同じ価値なのだと、漸くこの年齢になって思い至るようになったからでしょうか。

●【わんりいの催し】中国語で読む・漢詩の会

漢詩で磨く中国語の発音！中国語のリズムで読んで漢詩の素晴らしさを味わおう!! **録音機をお持ちの方はご持参ください。**



- 会場：まちだ中央公民館
- 日時：10：00～11：30、
11月25日(日)視聴覚室
12月16日(日)第3・4学習室
- 講師：植田渥雄先生 桜美林大学名誉教授、現桜美林大学孔子学院講師
- 会費：1500円(会場使用料・講師謝礼など)
- 定員：20名(原則として)
- 申込み：☎090-1425-0472(寺西)

E-mail: ukiuki65jpp@yahoo.co.jp (有為楠)

●【わんりいの催し】

ボイス・トレをして日本の歌を美しく!

漢あなたも私も笑顔が美しくなる!身体の力を抜いて、気持ちよく発声しよう!! 声は健康のバロメーター! 気持ち良く歌って毎日元気!!

***動きやすい服装でご参加ください**



- 会場：まちだ中央公民館
- 日時：10：00～11：30、
11月27日(火)視聴覚室
12月11日(火)視聴覚室
- 講師：Emme(歌手)
- 会費：1500円(会場使用料・講師謝礼など)
- 定員：15名(原則として)
- 申込み：☎042-735-7187(鈴木)

E-mail: wanli@jcom.home.ne.jp(わんりい)

使用済み古切手と書き損じの葉書でご支援を!

日本スリランカ文化交流協会では、スリランカへの教育支援の為、古切手と書き損じ葉書を集めています。皆様からたくさんの切手をお届け頂き感謝しております。古切手は周囲を1cmほどを残して切り取り、ついで折に田井にお渡し下さい。

【'わんりい'の原稿を募集しています】

'わんりい'は、2月と8月を除く毎月発行の当会の会報です。主として、会員と会の関係者の皆さんの原稿でまとめられています。海外旅行で体験された楽しい話、アジア各地の情報やアジア各地で見聞した面白い話、これはと思うイベント情報などを気軽にお寄せ下さい。

日中文化交流市民サークル 'わんりい'

行って来ました！‘わんりい’企画・陝北の旅・報告その-I

橋詰 滋

学生時代に第二外国語で中国語を学習しはじめたことにより、中国への関心が深まり、かれこれ20年くらい。中国への旅行も、北京、上海、蘇州、大連、成都など、ガイドブックに載っているようなメジャーな観光地を何度か訪問をしました。「そろそろ、あまり日本人が行ったことがないようなところに行ってみたいな」と、考えていたところ、『わんりい4月号』に「陝北黄土高原の旅」に関心をお持ちの方へ」という案内を発見！早速、企画者の田井さんに「是非行きたい」と申し出してみました。

当初は大勢の方が参加される予定(?) でありましたが、最終的に下記の5名の参加となりました。

成田出発組：柳田氏(会員)と奥様、橋詰(会員)

関空出発組：浪花氏(会員)と友人の榎野氏

【旅行の予定(当初)】

9/22(土)	関空組、関空→西安(MU2298) 成田組、成田→西安(MU521) 西安空港近くで宿泊
9/23(日)	黄陵→延安市内の棗園→延安泊
9/24(月)	延川県の黄河博物館→乾坤湾→小程村泊
9/25(火)	乾坤湾→清水湾→文安驛泊
9/26(水)	文安驛古鎮→高鳳蓮芸術博物館→西安泊
9/27(木)	兵馬俑→華清池→秦始皇帝陵→西安泊
9/28(金)	成田組、西安→成田(MU522) 関空組、西安→関空(MU2059)

右上に掲げます地図に、この旅の訪問地を記入してみました(手作りのため、位置関係が若干異なっていることをご了承ください)。

主に、陝西省の北部、いわゆる陝北地域を巡るものになります。陝西省の省都であります西安市から北へ300kmに位置します延安市を中心とする地域を回るものになります。

★1日目(9月22日)

いよいよ全6泊7日になる旅の始まりです。前日の夜は、学生時代以来の久しぶりの大型の海外旅行(当方は社会人であるため、長期休暇が取りにくい)



にワクワクして、夜はほとんど眠ることができませんでした。しかし、こんな状況でも朝は、何の苦勞もなく起きることができるものです。

10時半に成田空港に向けて自宅を自家用車で出発。途中横浜市内にて、柳田夫妻をお迎えし、一路、東名高速、首都高速、東関東自動車道を経て、途中の首都高速の渋滞に巻き込まれながらも、正味3時間半の運転で成田空港に到着。空港のチェックイン及び入国審査等はスムーズに進み、2時間くらい時間をもて余したので、空港内の銀だこでたこ焼きを食べつつ、今後1週間飲むことがないであろう日本のビールで乾杯をしました。また、西安でお世話になります中青旅山西国際旅行社の黄氏、運転手の張氏へのお土産として、北海道名物のじゃがポックルを購入しました。

こうして、空港での待ち時間はあっという間に過ぎ去り、我々は中国東方航空MU522便に搭乗し、

定刻の16時55分よりも少し早く出発しました。

この便は、名目上、西安行きの直行便であります。が、実は上海を経由する「経由型直行便」という、ややこしい便であります。19時5分に経由地の上海浦東空港に着き、一旦、乗客は目的地が西安、上海を問わず、全員降ろされ、入国審査を受けることとなります。我々は入国審査、そして国際線と国内線の連絡通路を経て、国内線となったMU522便に再搭乗しました。上海についてから、ここまで約1時間半、休む暇がなく、MU522便は、21時に西安に向けて出発しました。

23時過ぎに無事、我々は西安に到着しました。夜遅くにも関わらず、山西省国際旅行社ガイドの黄氏が空港に迎えに来られ、我々を空港近くにある陝西省空港大酒店まで案内をしてくれました。こんな夜遅くにお仕事をさせて、本当に申し訳ありませんでした。我々のこの日の長い移動は無事終了しました。

なお、浪花氏とその友人の榎野氏は、関西国際空港から出発し、我々よりも先にホテルにチェックインをし、すでにお休みになられていると思われたので、両名への挨拶は明朝にすることとしました。

★2日目(9月23日)

前の晩は遅い到着であったにも関わらず、目覚めは早く、早速朝食会場へ向かいました。

朝食会場にて、どこからともなく、関西弁が聞こえてきましたので、近づいてみると、やはり浪花氏と榎野氏でありました。私は両名に、昨晚できなかった挨拶を済ました。

両名の話によりますと、関西国際空港が台風22号の影響で、タンカーが連絡橋に衝突したため、空



黄帝陵

港機能がしばらく停止していましたが、ようやく出発の3日前に利用可能となったとのこと。もし関空が回復しなかったら、今回の旅行をキャンセルすることになったかもしれなかったため、本当に冷や冷やものだったとのことでありました。

5人となった我々一行は、9時にホテルを出発し、この日の最初の目的地である黄陵に向かいました。

ガイドの黄氏は、日本語が大変流暢なため、まるでここが中国であることを忘れさせるような感じでした。また、御年61歳にも関わらず、軽快な足取りで、肌もツヤツヤであるため、とても若々しい印象でした。

西安市内を抜けて30分もしないうちに、周りは荒涼とした黄土で形成された景色に変わっていききました。以後、この風景が何百キロも続くため、そのスケールの大きさに驚かされました。

西安空港からおよそ200km北上し、11時半頃に、黄陵に到着しました。黄陵は、中国で確認されている最初の王朝の殷王朝よりも、遥かに昔の三皇五帝の時代に存在していたかもしれない、漢民族の祖とされる黄帝のお墓であります。また、中国文明の礎を築いた人物でもあり、中華民族の神様みたいな存在であります。

陵の入場料は大人90元ですが、「65歳以上の方」、「12歳未満の方」、「軍人」、「障害を持たれている方」は無料(ただし、保険料5元は別)でありました。

今回の一行の中で、この条件に該当しないのは、私のみのため、私だけが入場料を支払うことになりました。無料と90元とでは、相当差があるんじゃないのかな、と内心思いましたが、バリアフリーが日本ほど進んでいないが、ご高齢の方にとって非常に優しい国になったなと思いました。また、15年くらい前に中国のこのような観光地に行った際には、記憶があいまいであります。10元くらいの入場料だったと思います。そうすると、この間にずいぶん物価が上昇した感じがし、同時に中国経済の発展の著しさも感じました。以後、この旅では、「ご高齢の方無料」という観光地をいくつか目にするようになります。



黄帝陵にて参加者とともに

黄陵は、麓の部分に中国の皇帝の使者や毛沢東、蒋介石等の書を写した石碑があり、山の高い場所には黄帝のお墓があります。高い場所へは、徒歩で登ることも可能ですが、我々は20元を支払いカートに乗って途中まで移動し、下車後、650mの距離を徒歩で移動しました。皆さんは私よりも人生のご先輩(失礼いたしました)であるにも関わらず、足取りが軽いこと。この時ばかりは、自分の日頃の運動不足や不摂生を実感しました。

黄陵を見学した後、13時過ぎに、遅い昼食を近くの食堂でしました。羊肉のラーメン(麺は日本蕎麦を太くしたものに似ています)もしくは牛肉のラーメン、厚揚げとキュウリの冷菜、骨付き肉が入った鍋料理、ジャガイモの細切り炒めといった豪華な料理を美味しくいただきました。

14時半頃に、次の目的地である延安に向けて出発しました。バスの中では、一行は黄陵で歩き疲れたため、寝入ってしまい、午前中の元気はどこやらという雰囲気。延安に近づくにつれて、車窓から、ヤオトン(山肌に掘った穴の住居)が目立ち始めてきました。

16時半に、100kmくらいの距離を走り、延安に到着しました。延安は毛沢東の長征が終了した場所であり、中国共産党の勢力が拡大化した町であるため、中国共産党の聖地とも言える場所でもあります。そのため、中国共産党や毛沢東に関する史跡が多く存在し、中国の政府関係者等の社会科見学の場にもなっています。

我々は、毛沢東を始め創設期の中国共産党の指導者の居宅や党の本部的な機能がありました棗園を見学しました。名前のとおり園内には棗の木がたくさ



毛沢東と4人の仲間達の像

ん生育しています。ちなみにナツメは延安の名物らしいです。毛沢東等の居宅はヤオトン形式であり、当時のままで保存されていました。

18時に棗園の見学を終え、延安市内に移動し、18時半すぎに、延安でも有数の銀海国際大酒店にチェックインしました。夕食はホテル内にあるレストランで羊肉の鍋、スーランタンの水餃子等を食べました。食後はたくさん食べたのでダイエットのつもりで、街中に繰り出し、途中で見た宝塔山のライトアップが綺麗であったため、「明日の午前中はそこに行きましょう」ということに決定し、この日の日程は終わりました。

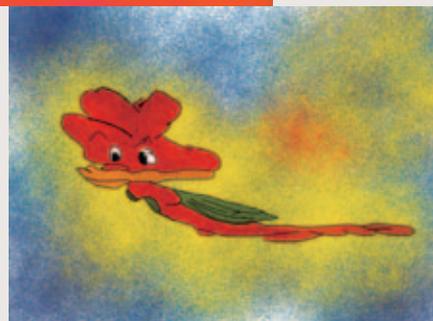
(続く)



SAMIRA イラスト館

2018年11月

皆さんは、サミラさんのイラストからどんなことをイメージされますか。



海外出張の思い出 (旧ソ連・ノボロシースク編 ⑨)

高島 敬明

7月ごろだったと思います。日本では考えられないことが起こりました。この地方特有の強風が吹き荒れて仕事の中断期間が長引き、全体の工期に遅れが出ていたころでした。何とか工期に間に合わせるため据付け要員を日本から1チーム4名増員することになりました。派遣される作業員名簿が送られてきましたが、皆国内で一緒に仕事をした仲間なので、心強く頼もしく思いました。

ところが、プロマネに誰が4人に同道してくれるのか聞きましたら、人選中とのこと。そして最終的にT貿易の人が一緒に来てくれることになりました、とだけ言われ通訳は同道しないとのことでした。私は、「4人とも現場の人で中にはローマ字も満足に書けない人もいます。通訳がいないとダメではないですか!」と強く抗議しました。しかし、プロマネはT貿易に重々頼んでありますから、と言うだけです。寺島さんにも相談しましたが、「高島さん、心配いりません。外国人はこの国では迷子になったり、行方不明になることは有りませんから」と涼しい顔で言われるだけでした。何を言われているのかわからず、私は心配で胃が痛くなる思いでした。

案の定、到着の時間になってもとうとう到着しませんでした。プロマネに抗議して捜索をお願いしました。しかし、「そのうちに着きますから」と素っ気ない返事が返ってくるだけです。他の作業員と心配しながら待つしかありませんでした。まる3日過ぎた夕方遅く、プロマネが「これから迎えに行きましょう」と一言。「どこに行くのですか?」「マイクロバスの運転手が知っていますから」とのやりとりのあと、ともかく班長を連れて車に乗り込みました。街灯のない真っすぐな道を何時間走ったことでしょう。すでに夜の11時をまわっていました。しばらく行くと道端のようなところで車は止まりました。寺島さんがいないので状況は全

く分かりません。1時間も待ったでしょうか。〈ブーン〉という回転音がしてセスナを少し大きくしたような飛行機が着陸して少し手前で止まりました。機内から折り畳みの階段が下ろされ、飛行機の小さな照明の中、大きな荷物を持った見覚えのある面々が恐る恐る下りてきてキョロキョロしていました。班長が駆けつけると荷物を放り投げて手を取り合って喜んでいました。私は暗闇の中、涙目になり先が見えなくなってしまいました。

外国人はいつも監視されているわけですから、この国では迷子になることはないのです。ようやく寺島さんの言う意味が分かりました。

この件は一件落ち着きましたが、思いもよらない大事件(?)が起こりました。真夏のある日のことでした。計装屋(電気)さん、保温屋さんの大きな輸送梱包には余裕があり、先述のゴムボートもそうですが、サイクリングの折り畳み自転車、野球道具、何点ものレジャー用品が梱包の中にいっぱい入っていたのです。仕事場は海の近くなので、海水浴をしたりレジャー用品などで日々を過ごしていました。

そんなある日、事件が発生したのです。夜の10時頃保温屋さんの責任者が私の部屋に入って来ました。まだ3人寮に帰ってきません、との報告です。



ギャングウェイの垂直に立てる作業です。一番の見せ場でした。

この頃になると街に繰り出し最終バス後にタクシーで帰って来るものが時々いたものですから、私もあまり気にせずもう少し待ちましょう、と気軽に話しましたが事情の分かっている責任者は心配そうな面持ちで、ぼそぼそと話しました。休日の今日朝食後、3人の作業員が半ズボンに自転車競技用のヘルメットをかぶり、何も言わずに日本から無許可で持ち込んだサイクリング用の自転車で勇躍遠くまで出かけて行ったそうです。

私は事態の深刻さにすぐ気づき、寺島さんに相談しましたが、「情報はこれ以上入りません。当局から連絡が有るまで待つしかありません」との返答でした。とりあえず海運省、交通警察に報告して待つしかないわけです。みんなが心配して待つこと3日、昼頃になってやつれた表情ながら3人とも元気で帰ってきました。色々聞いても当事者自身が何がどうなったのか理解できず、言葉も通じない中での留置でしたので待遇のようなものしか報告はありませんでした。結局、最新式のギヤ式自転車もかっていいヘルメットも返されないままになってしまいました。

寺島さんの話では、港町であるノボロシースク市周辺は回教とロシア正教との宗教的な接点で非常にピリピリしているところであり、また国境に近いところから遠出する人は国民、外国人を問わずパスポートが必携のため、不審人物、パスポート不所持などの理由から収監されたのではないかと、との見解でした。我々の寮の裏山の頂上付近の展望レストランを目指し昼には美味しい料理でも、との目論見だったことでしょうか、3日間鉄格子の中でトイレもままならず粗末な食事で辛抱しなければならぬ羽目になり、帰寮後は厳重注意を言い渡されることになったのでした(この事件は寺島さんの著書にも記載されています)。

このような作業員とは対極にある人物が寺島さんでした。寺島さんは希にみる人格者で曲がったことが嫌いで責任感が強く、そして温厚な人柄でした。常に同じ日本人としての誇りを持って仕事をしていました。こんなことがありました。鉄骨で組み上げたギャングウェイの上に3.5トン吊りの荷物積込用のクレーンがあります。クレーンは、G鉄鋼所で製作され仮組検査、運転指導には私が日

本で立ち会いました。当然現場でのソ連側への引き渡しには私が立会い、指導します。海面から50メートル、の高さですので安全ベルトを締め、鳶さんの足袋を借りて垂直な梯子を登らねばなりません。班長から「空の流れている雲は見ないように」と注意されました。流れているものを見ると自分が倒れていると錯覚して手を放してしまうことがあるそうです。

寺島さんには年齢的に無理だから来ないようにと言い残し、ソ連人の監督官と二人で上って行きました。下で皆が見ているので私は強がって急いで上りましたが、緊張と高さで手はブルブル、喉もカラカラの状態でした。やっと頂上の運転席にたどり着いて下を見ると、なんと3分の2位のところに一段一段寺島さんが上って来るのが見えました。降りるように怒鳴りましたが、上って来るのです。高島さん、通訳がないと困るでしょ!と言われました。目頭が熱くなりました。狭く、風の吹く中、少し揺れる中、30分くらいで無事引き渡しは終わりました。寺島さんとの絆が更に深まったように思いました。

さて、夜のミーティング、飲み会、反省会が毎日のように続いていましたが、ある時私の北海道での話になりました。寺島さんに私は土木技師であること、土木の中でも花形だった橋梁のゼミで勉強したこと、橋の工事につきたくてN社に入ったことなどを話しました。北海道では、小樽築港の倉庫群に向かう跨線橋、帯広でも駅の近くで大きな跨線橋の工事に携わったことなどを話している時、寺島さんの目が微笑むように輝きました。そしてぼそぼそと話し出されたのです。父親が道庁に勤めていて道内を転々としましたが、帯広にも住んだことがあります、と遠くを見る様に、昔を思い出しているかのように話されました。生まれは根室で貧しく育ったこと、兄弟は姉さん兄さんが何人かいたこと、とどまることなく話し出されたのです。

歴史の一ページを飾った寺島儀蔵さんの波乱の人生は、一部これまでに書いた内容と重複するところもありますが、寺島さんの語り口に極力近づけて次号に書いて行く予定です。

(続く)

再びソウルへ

(2018年10月3～6日)

関根 茂子

5月は雨にたたられ博物館巡りでハイキングはできなかった。そこで、S姉から再びソウルでハイキングのお誘いが来る。行きそこなった雲吉山と5月に仁川空港で入手した「ソウルアウトドア」に紹介されているソウル漢陽都城ギルの白岳山を歩こうと10月3～6日に出かける。メンバーは70代の女性4人。晴天続きの天気予報は台風25号の接近で最終日に雨マークがついてしまったが、中日の4,5が降らなければ御の字だ。

チェジュ航空(往復@34,500円)は成田空港第3ターミナルから出発、食事・飲み物は有料なのに5月利用のアシアナ航空より3,700円も高い。泊まりは鍾路3街のフォーチュンホテル3連泊(ツイン1室@8,000円)だ。

■10月3日(水) 晴

成田空港第2ターミナルから無料バスで第3ターミナルへ行く。チェジュ航空7C1011便は定時11:50に出発、順調に飛んで仁川空港第1ターミナル14:30着。入国審査は自分でパスポートをスキャナ台に置いてスキャン、入国のスタンプは省略されていた。両替(日本円1万円=88,200₩[1ウォン≒0.1円])後、共同費として@10,000₩を拠出する。

ホテルのある鍾路3街駅へは空港鉄道を孔徳で地下鉄5号線に乗り換えるのだ。孔徳までの空港鉄道普通電車1回券を購入(4,150₩+保証金500₩)、地下鉄の乗換は路線番号と路線色の表示を見ながら歩けば問題ない。鍾路3街駅の6番



曲牆から景福宮と世宗大路(右下)を見下ろす

出口に近い地下鉄の改札口で地下鉄のカードをタッチするがゲートが開かない。駅員はどこにもいなく、どうしようもなく押し通って出た。

出口からホテルへは、地図を見せて道を教えてもらい、地番を頼りに探した。ホテル着17:00頃、シングルと2段ベッドがあり洗面所にトイレとシャワーが同居、7時からトースト、茹で卵、コーヒーの朝食が無料だった。夕食は近くの焼肉店で骨付き豚肉を2人前80,000₩、ご飯が付いていなかったの、戻る途中でヘルムパジョを1枚15,000₩を分け合って食す。S姉の判断で明日はソウル漢陽都城ギルの白岳山ハイキングとなる。

■10月4日(木) 晴

8:05ホテル出発。地下鉄3号線で景福宮駅へ3番出口で地上へ8:30、郊外へ向かう緑のバス7212番、1020番、7022番の乗り場を探して1020番に乗車。地下鉄カードがそのまま使える。バスは混雑していた。下車のバス停は尹東柱文学館と運転手に伝え、8:49無事に下りられた。

◆漢陽都城とは：朝鮮時代に、首都漢陽とそこに住む民を守っていたかつての城郭で、高さが平均約5～8m、全体の長さは約18.6kmに至る。ソウルの中心部を囲んでいる北岳山、駱山、南山、イヌアンサン仁王山の稜線に沿って築造された後、幾度も改築が重ねられた。1396年から1910年までの514年間という長きにわたり、都城の機能を担った漢陽都城は、全世界の都城の中で最も古い歴史を誇る。漢陽都城は4大門と4小門を持つ。この道のうち70%は整備され、現在、全部で6区間の散策コースが設けられている。

(ソウル市公式HPより)



北漢山(筆者スケッチ)

そこには2人の軍人の銅像(朝鮮戦争で功のあった?)があった。バス停すぐ横の階段を上ると彰義門^{チャンイムン}に出る。詰所の男性にデジカメを見せて写真を撮りたいとジェスチャー、彼は門をくぐった先に案内して、ここからなら門額が入ると教えてくれた。彰義門案内所は9:00から、「北岳山ソウル城郭探訪」出入り申請書を記入してパスポートを提示、貰った許可証を首にかけて9:10入場する。左側は石造りの城壁、真ん中に段差の大きい石段、右側は手すり柵、柵の外はかつてそこを歩いて登れたと思われる踏み跡が続く。柵の際に白い小花が手毬状に集まった花房をたくさんつけた野草が目につく。日本では見たことない。帰国後調べたらマルバフジバカマ(北米原産)だった。日本では西の地方にあるフトボナギナタコウジュもあった。日本で見るより花が大輪のノギクが数種類あった。足元の花を数えながら階段登りに励む。右手内側の山麓には青瓦台^{チョンワデ}があるため目隠し板が続く。左手、城壁越し、付岩洞^{フアムドン}の街並みの先には緑の山肌に白い花崗岩の頂というたおやかな峰々が連なり、右端がぐんと高まった山が北漢山^{フカンサン}だろう。そんな景色をスケッチに収める。

白岳山=北岳山まではまだ登りが続く。監視所から山頂(342.5m)10:50まで往復する。南の脚下に木の間越しに景福宮のお庭に池が見下ろす。分岐からは下りだ。幹に赤○印が付いた「1.21事態の松」が現れる。1968年1月21日、北朝鮮の特殊部隊が大韓民国大統領府「青瓦台」を襲撃した時の韓国軍警との激しい銃撃戦の被弾痕だ。さらに下り青雲台^{チョンウンデ}の広場11:09~11:35で

手持ちのパンを食す。北西の峰の連なりに北岳八角亭^{フガク}?が望まれた。

ここから道は一度、城郭の外に出るが、再び中^{コクチャン}に戻り城郭が一部丸く突き出した曲牆11:57を往復する。曲輪からは、たどってきた白岳山からの城壁が見渡せる。また景福宮^{カンフアムン}から光化門^{セジョンデロ}の真っ直ぐ延びる世宗大路、その左のソウルタワーをのせた南山公園^{ナムサン}も良く見えた。松林の続く広い道を緩く下り蠟台岩^{チョッテ}12:15に立ち寄り、ソウル城郭の北大門に当たる肅靖門^{スツジョンムン}12:30をくぐる。この門はさらに結構な下り道で馬岩案内所^{マルバウイ}に導かれる。ここで許可証を返却12:56~13:11。

直進の道を捨て、右手に折れ臥龍公園^{フリョン}へ向かう巻き道に行く。右上に城壁が続いている。城壁沿いに進めばいいのだ。分岐では文字を確かめ公園に着く。恵化門^{ヘフアムン}へ1.7kmの表示を見て13:55、右、城壁の下を歩く。左は住宅街だ。次いで暗門^{アンムン}をくぐって14:05城郭の内側に戻り、公園内の舗装路を行くと外の車道に出る。十字路はそのまま直進、恵化門への距離が記された案内を頼りに街中を進み、最後は階段をあがって復元された恵化門14:44の裏側に出る。門をくぐり抜け、表階段を下る。車道を東にとって地下鉄4号線^{ハンソンデ}の漢城大入口^{イク}駅14:53に到着。

腹ペコだったので、鍾路3街駅の手前の鍾路5街^{クワンジャン}駅で下車、5月に行った広蔵市場^{クワンジャン}で海鮮チヂミを食べる。市場を見物がてら鍾路3街のホテルまで歩いて帰った。途中でお土産に干し柿を購入(9,000₩)。ホテルでひと休み後、鍾路製麺所でビビンバ^{ビビンバ}麺(7,000₩)の夕食、満腹だ。



広蔵市場のチヂミ店



万頭入り鍋

明日の雲吉山へのアプローチの地下鉄路線・乗換駅を調べて、寝に就いた。

■ 10月5日 雨

7時に食堂で朝食を摂って8時出発と支度をしていると、台風接近のため天気が急激に悪くなり本日は雨との予報。山は諦めて10時から宗廟チョンミョの日本語ガイドツアーに参加しようと9時半にホテルを出て傘を借りて歩いていく。

入場券売り場には外国人19歳から64歳の料金1,000₩とあり65歳以上は無料だった。団体ツアー客といっしょに、雨の中、日本語で解説してくれる韓国人ガイドに案内されて見学する。

宗廟は儒教の思想に基づいて建てられた朝鮮王室の歴代の王と王妃の神主(位牌)を安置し祭礼を行う霊廟だ。庭の池には鯉はいない、池の中の築山には松でない樹木(名前は忘れた)が植えられている。

初代の王様である太祖を初め、功德のある王と王妃49位が祭られた「正殿」は横長の建物で赤や緑・黄色などの華やかな色彩ではなく錆びた朱色の柱がずらっと立ち並んでいる。簡素な中に荘厳な趣が感じられように造られたということだ。長さ100mはあろうかとカメラの画面には収まりきれないほどの長さだった。別廟に当たる「永寧殿」も同様の建物で、太祖の4代祖ヨンをはじめ、主に没後、追尊された王と王妃34位の神主が安置されていると

いう。傘をさして説明を聞くうちに、あっという間に案内時間の40分が終わってしまった。

次はどこに行ったらいいのがガイドをしてくれた女性にたずねると、景福宮の隣の古宮博物館を推奨された。歩いて行く途中に前回、素通りしたタブコル公園11:22に立ち寄る。1919年3月1日、33人の民俗代表が独立宣言を読み上げた＝三一独立運動が行われた歴史的な場所だ。中に入ると独立宣言文を刻んだ大きな石碑が建てられていた。雨を避け東屋の石段に腰掛けひと休み。ガラス塔の中に十層の古びた大きな石塔が納められていた。円覚寺址ウォンガクサと日本語の解説板があったから十三層の塔なら分かる。聞いてみれば三層は壊れて無くなったということらしい。

世宗大路に着き、光化門方向をみると、5月に見た世宗大王像の左手の北漢山と思っていた三角山の後ろに山並みが見えるではないか。稜線の形



宗廟



地下鉄入口には地上の雨水が入らないように段がある

から、昨日スケッチした山並みに間違いはない。ということは前回の記事に北漢山と書いてしまった山は昨日登った北岳山＝白岳山が正しいのだ。誤認した北漢山は世宗大王像の右奥後方に尖がりを見せている山なのだった。そんな山並みも雨ですぐにみえなくなってしまい残念！

光化門の前後4隅には、門衛が立っていた。雨宿りしたことを思い起こしながら、またも傘をさして門をくぐって左手の国立古宮博物館に向かう。ここも無料公開している施設だった。李氏王朝の印章、衣装など展示されていた。装飾をこらした王宮の造り、庭の東屋？などが巨大スクリーンに映し出される。ベンチに座ってゆったり見た。タッチパネルで礼装を装着するまでが見られたのが面白かった。

地下鉄3号線景福宮駅5番出口が博物館入口のすぐそばで助かった。2駅で鍾路3街駅に戻り、昨日の製麺所で饅頭入り野菜たっぷり麺入り煮干し出汁の鍋(@10,000₩)を遅い昼食に摂った。温かくておいしかった。ホテルで教えてもらったサウナの場所を確認してから14:40ホテルに戻る。1時間後、^{インサドン}仁寺洞スパ&サウナへ。(@9,000₩) タオル貸与の公衆浴場だが石鹸・シャンプーはない。3日ぶりのお風呂、やっぱりお風呂はいいな。近くのスーパーを偵察後、近所の果物屋でミニトマト(@7,000₩)を購入。夕飯は持参のパンとトマト、コーヒーで済ませた。

■ 10月6日 雨後晴

フライト7C1104便は15:05なので、スーパーの開店10時を待って買い物をしてから空港に向かえばいいと朝食後、部屋で待機。テレビを見てみると済州島に台風接近、大荒れの天候だ。台風は午後、日本海を東に進む予報だ。飛行機が飛ぶのか情報が欲しいので、空港へ早く行った方がいいと判断して9:00出発。往路と同じく、弘徳駅で乗り換えよう。空港鉄道の切符を買おうと売り場を探すが分からない。駅は地下3階構造で、人に聞きまくった結果、やっと有人の案内所に到達できた。行きの使用済空港鉄道1回券を示すと、精算機の場所を指し示す。@500ウォン返金される。

外国人がチケットを示して、このまま改札を通っても問題ないと言われているのが聞こえた。どうやら、地下鉄カードでも空港鉄道に乗れるようだ。カードを提示すると先方は機械で残額をチェック、1名が金額不足で問題あり。チャージをして、改札を無事に通過、階段を下りれば、空港鉄道のホームだった。何やかやで、第1ターミナル駅で下車したのは12:00、雨はやんでいる。

済州航空のGカウンターに急ぐ。チェックインも機械でやらなければならない。日本語の指示を聞きながら、四苦八苦してチケット発券をクリア、荷物を預けるのも自動化されている。タッチパネルにふれて荷物に着けるタグシートを出して、自分で荷物に取り付け、控えの券を出すのだった。自動化は企業には優しくても利用する人間には厳しい！

12:50中2階の食堂街で昼食(@15,500₩)手荷物検査・出国審査を済ませたら搭乗時間の10分前だ。14:30搭乗開始で順調に飛ばうので安心。ところが、出発時刻1505なっても一向に動き出さない。離陸を待つこと50分、晴れた下界を眺めて飛び立った。成田18:00着。

4日間でまたもや雲吉山が残ってしまった。次回こそは登りたいものだ。 (完)

料理講座・インドネシアのココナッツ・カレーとレンペル・アヤム

講師：ロサリタ（ジャカルタ出身）

2018年9月25日（火）麻生市民館・料理室、参加者：13名

ほぼ1年振りの料理講座は、昨年6月の、インドネシアのチャーハン・ナシゴレン等の講座に引き続いて、今回もジャカルタ出身のロサリタさんにココナッツミルクに焦点を当てたインドネシア料理を指導頂いた。「インドネシア風ココナッツカレー」とバナナの葉で包んだココナッツ味のチマキ「レンペル・アヤム」の指導に加えて、デザートもココナッツ風味のデザートでココナッツミルク、オンパレードを楽しんだ。

ココナッツミルクは、カリウムやマグネシウム、鉄分などのミネラルが豊富で、近年若い女性たちの間で人気の食品になっている。手に入り易いし、値段も手ごろでほのかな甘さが優しい。東南アジア、特にインドネシアでは日常的にいろいろな料理に使われている食材だ。

インドネシアのカレーはベースを作ってしまうと、後は、長く煮込んだりせず手軽にさっとできる。カレーベースのさわやかな風味が生きていて、今年の夏のような酷暑の夏には、気軽でしかも美味しいのではないかと感じた。ベースになるソースではいろいろな香草や玉ねぎなどが使用されるが、カレー料理自体の材料はいたってシンプルだ。香草をペースト状にして炒めたベースにジャガイモと鶏肉だけが一般的だそうで、今回は「日本の方は野菜が好きだから」と特別にキャベツを加えてくださった。そのキャベツも甘くておいしかった。

昨年のナシゴレンでも、具になる鶏肉をナシゴレンベースで炒めた後、ご飯を加えて炒め、半熟の目玉焼きをその上にのせて終わりだった。そういえば中華料理の炒め物も単品の具を炒めたものが多いことを中

国に通うようになって知った。

私はといえば、単品の炒め物は淋しくて、つい3種類、4種類と具を増やしてしまう。ナシゴレン

もいろいろな野菜を入れてカラフルにして楽しんでいる。折角、現地そのものの味を指導頂いているのに私のところに来ると、あっという間に田井さん家流の料理になってしまうのだ。

さて、では講習会参加の皆さんに自宅でインドネシア料理（他、東南アジア料理）を調理して楽しんで頂けるだろうか。香草など最近はかなり手にはいり易くはなったもののまだちょっと難しいかもしれない。だが、恐れることはない。手に入らないものはなくてもよいし、日本の食材から似たようなもので工夫してみよう。少々、香りや

味覚に違いがあるとしても、そのようにして様々な食文化が融合し、自国の味になってきたのに違いないのだから。

基本的な味付けの塩梅あんばいがよければ間違いなく美味しい筈だと思う。

（報告：田井光枝）



カレーベースを炒めるロサリタさんの手元を真剣に見る



もうすぐランチですよ～



白きくらげとパンダンの葉で色付けした白玉団子のココナッツ味のデザートパンダンの葉の香りが爽やかだ



【レンベル・アヤム】

バナナの葉で包んだインドネシア風ちまき(レンベルアヤム)は、茹でて細く裂いた鶏(アヤム)・ムネ肉の香草炒め煮を具に、ココナッツミルクで炊いたもち米で海苔巻のように巻き、切り分けてバナナの葉で包む。冷凍も可能。冷めて硬くなったら電子レンジでチンすればよい。バナナの葉の鮮やかな緑が目にも爽やかで食欲を誘う。バナナの葉が手にはいらぬときは葉蘭でもよいそうだ。コーヒーにもよく合う。

10年ほど前にも指導頂いたが、その時は具を入れてお握りのように握った。今回は、日本の巻き寿司のように巻き簾の方法を教えて下さった。うっかり巻き簾の用意を忘れたら、ロサリタさんはしばし考えてバナナの葉を代用して巻いた。

ジャワ風チキンカレー (7、8人分)

【カレーのベースの作り方】

(材料A) 玉ねぎ(中1個)、赤ピーマン(1/2個 ※パプリカの時は1/4個)、ニンニク(5片)、カー(親指大)、ターメリック(P)(小匙2)、コリアンダー(P)(大匙1弱)、キャンドルナッツ(4個)白胡椒(大匙1/2弱)

(材料B) コブミカンの葉(5枚)、レモングラス(2本)、サラダオイル(大匙3)

- ①材料Aをフードプロセッサーに掛けてペースト状にする
- ②(A)をフライパンに移し、材料Bを加えて中火で水分を飛ばすように良く炒めてからサラダオイルを加えて更に炒める。

※カレーベースは冷凍保存可。多めに作って保存しておくとい

【カレーの作り方】

(材料) 鶏もも肉(1kg)、ジャガイモ(中4個)、キャベツ(1/4～1/3個)、ココナッツミルク(2缶)、パームシュガー(大匙1.5～2)、白砂糖(小匙2～3)、サラダオイル(大匙2)、塩(小匙2～3)。

- ①鍋にサラダオイルを入れ、上記のカレーベースを移してさらによく炒めてから、コロコロに切った鶏もも肉を根気よくひたすら炒める。
- ②食べやすいサイズに切ったジャガイモ、キャベツを加えて炒める。
- ③ココナッツミルク1缶を加えてからひたひた程度に水を加えて火力を抑え気味に静かに煮る
- ④塩、パームシュガー、白砂糖を加えて30分ほど煮てからココナッツミルク1缶を加えて味の微調整をし火を止める。



今回使用の香草：上から香菜(パクチー)、コブミカンの葉、レモングラス、バナナの葉(レモングラスの下の葉)、カー(生姜状の根っこ)、パンダンの葉(香と色付けに使用する)



インドネシアカレーはえびせんが付く

お祖母さんの次粉cí fěn (ツーフエン) 李晴

(岩田温子訳)

私は幼い時山西省北西部の黄河に面した河曲というところに住んでいました。夏になると耐え難いほど暑くなるところです。当時、家はとても貧しく、美味しい食べ物などは何一つありませんでした。

ある年の夏、母が病気で入院をすることになり、私は家から遠く離れた母の実家にひと月以上も預けられることになりました。私は従姉妹たちと一緒に学校へ通うことになりました。昼ごはんの時間になると学校を出てお祖母さんの家に戻ります。頭の上を太陽がかんかん照りつけ、お腹は空き、のどは渴き、やっとの思いで家にたどり着きますと、お祖母さんが昼ごはんを作ってくれていました。

鍋の蓋をあけると熱気がもうもうと立ち上り、全く食欲が失せてしまいました。何か冷たいものが食べたかったです。熱々のご飯を見て、私はたちまちボタボタと涙をこぼしました。その後何日も、私はご飯を見ると泣いてしまいました。とうとう祖母は私に「次粉」を作って食べさせてみようと思いつきました。

次粉の作り方はとても簡単です。豆の粉と水を6対1ぐらいの比率でよくかき混ぜ、糊状にします。次に鍋の中に入れて、かき混ぜながら加熱をします。

良く火が通り、ねっとりとしてきたら豆麺の出来上がりです。お祖母さんの家には大きな水甕がありました。中には冷たい井戸水が入っていて、お祖母さんはその水甕の外側を擦り洗って清潔にし、それから糊のような豆麺をさっと表面に擦り付けて均等な薄さの長円形を作りました。数分後には熱くて蒸気がふつふつとしていた豆麺のドロドロとしたものがひんやりと冷たく柔らかな麺になっていました。お祖母さんはそれを水甕から注意深くそっと剥がし、まな板の上に置き、細い糸のように切りました。この豆麺

はとても美味しく、故郷の人たちは「次粉」と呼んでいます。

その次に、お祖母さんはタレを作りました。漬物の汁、みじん切りの葱、キュウリの千切りにしたもの、香菜、塩、酢、胡麻油を混ぜ合わせたものです。

冷たく滑らかな次粉に振りかけられた酸っぱい香りのタレで、私は一気に大椀一杯を食べてしまいました。

お祖母さんは私にもっと食べさせようと米次粉を考え出しました。これは糊状の豆麺に粟粥を少し混

ぜたものです。それを水甕の表面に擦りつけますが、一粒一粒の粟粒が飛び出てそんなに滑らかではありません。まるで綺麗な娘さんの顔のあばたのようでデコボコしています。でも米次粉を水甕から剥がし、細く切って糸のようにしたところにタレをかけたその味は本当に美味しいものでした。豆麺の柔らかくて滑らかな舌触り、粟の清々しい香り、タレのさっぱりとした味わい、これこそが炎天の夏の醍醐味でした。



筆者。太原の老舗焼麦屋「清和元」で。
2017年2月

お祖母さんがこの世を去ってからもう久しく、私も大都市での生活が長くなりました。夏がやって来て、堪え難い暑さになると私はお祖母さんの作ってくれた次粉を思い出し、自分でも作ってみます。でも、大きな水甕はありませんので、代わりに大きくて浅い陶器の鉢を使います。鉢の内側に薄く、薄く豆麺を塗り、鉢ごと冷蔵庫の中へ入れて静かに待つのです。タレは塩水に千切りのキュウリ、切り胡麻を散らしたもので美味しくですよ。皆さんもお試してください！

李晴さん：1966年生まれ。1999年に私が山西省北西部を旅行中、旅行社の紹介で現地に詳しい人、ということで見会いました。明るく、聡明な人です。以来18年近く何度も山西省の旅を共にしました。現在太原市の中学校で国語と書道の先生をしています。(岩田温子)

《'わんりい' 掲示板》

●わんりい料理講座演

食の知恵と工夫がいっぱい! 中国西北地方の粉食文化(麵料理)其のII

* 中国では粉食料理は全て麵料理と呼ばれています

西太后が愛した玉米の蒸しパンと蕎麦粉の蕪入りクレープ風

■日時: 2018年11月15日(木)

10:30 ~ 14:00

■会場: 麻生市民館・料理室(小田急線新百合ヶ丘北口、徒歩3分)

■参加費: 1500円 ■定員: 15名

■講師: イエリン(中国遼寧省出身/イラストレーター/日本のキャラ弁文化を中国に紹介して好評を博す。10月の料理講座担当の呉躍鳳さんはイエリンさんのお母さん)

■メニュー

1) 玉米面窩窩頭(トウモロコシ粉の蒸しパン)

2) 蕎麦面蕪菜餅(蕎麦粉の蕪入りクレープ風)

3) 茹でて、焼いて、蒸して作るほろほろのトンポーロー(東坡肉)

4) 中華のスープとサラダ 5) 中華のデザート

* エプロン、筆記用具、布巾をお持ちください

◆申込み&問合せ ☎042-734-5100 'わんりい'

E-Mailwanli@jcom.home.ne.jp



イエリンさん



玉米面窩窩頭



蕎麦面蕪菜餅

●江西省文化年の第五弾イベント、江西省群衆芸術館の運営による「心・印-江西省書画展」書道、中国画の小品50点を展示

* 詳細: <http://www.ccetok.com/event/event-detail/?id=10232>

■日時: 2018年11月6日(火)

~ 16日(金)

10:30 ~ 17:30

(土日祝休館)

■会場: 中国文化センター

(港区虎ノ門3丁目5-1)

■主催: 中国文化センター

(港区虎ノ門3丁目5-1)

◆申込みと問合せ ☎042-734-5100 'わんりい'

E-Mailwanli@jcom.home.ne.jp



●中国文化センター 11月の映画上映

「渡し場」(原題: 我的渡口) 93分

監督: 石偉 *字幕あり

■日時: 2018/11/15(木) 15:00 ~

■会場: 中国文化センター

* <https://www.ccetok.com/>

■定員: 30名先着順 参加: 無料

■申込み: 2018/11/14迄に

◆問合せ・申込み: ☎03-6402-8168

中国文化センター(港区虎ノ門3丁目5-1)



●町田国際交流センターの催し

第16回留学生トークプラザ

留学生たちの素晴らしい日本語と、異なる視点からの鋭い観察と主張を聞いてみよう!

* <https://www.machida-kokusai.jp/>

■日時: 2018年11月18日(日)

14:30 ~ 17:00(開場13:30)

■会場: 町田国際交流センター

東京都町田市原町田4-9-8、JR横浜線町田駅ターミナル口歩3分、小田急線町田駅歩10分

■申込み方法: FAXで、住所・氏名・参加人数と電話番号を町田国際交流センター「留学生トークプラザ」係へ(FAX 042-722-5330)

◆問合せ: 町田国際交流センター

(8:30 ~ 17:15/日・祝除く)

入場無料

●お茶会“ペルーのお国紹介と交流”

ペルーの生活・文化紹介とお茶を飲みながらペルー人と交流

■日時: 2018年11月18日(日) 10:00 ~ 12:00

■会場: ソレイユさがみ セミナールーム1

(橋本イオン6階) * <http://www.soleilsagami.jp/>

■定員: 50名(受付順、希望者は直接会場へ)

◆問合せ: 042-750-4150 さがみはら国際交流ラウンジ

●監督: パトリシオ・グスマンによる台地を感じる映画たち

■会場: 地球市民・あーすぷらざ5F映像ホール(120名)

■日時: 2018/11月11(日)、10:00/13:00/16:00

①「光のノスタルジア」(2010/90分/日本語字幕あり)

天文観測拠点先端を行くチリのアタカマ砂漠。独自の表現で余韻を残す映像

■日時: 2018/12月2(日)、10:00/13:00/16:00

②「真珠のボタン」(2015年/82分/日本語字幕あり)

西パタゴニアの海底で発見されたボタン…。

■参加費: 大人400円/小中学生100円

◆問合せ: ☎247-0007 横浜市栄区小菅ヶ谷1-2-1

申込み不要、各回30分前開場、定員に達した場合は入場不可

●初心者体験のお誘い【鶴川水墨画教室】

季節の花など水墨画で描いて楽しんでみましょう。

体験参加1000円です。手ぶらで参加OK! 見学は無料です。気軽に教室を覗いて見よう!!

■講師: 満柏

■会場: 鶴川市民センター

町田市大蔵町1981-4

* 駐車場あります

■日時: 第2又は第4月曜日、14:00 ~ 16:00

■体験参加費: 1000円(見学無料/手ぶら参加可)

■問合せ: ☎042-735-6135(野島)



参加無料

●「わりりい」も参加！ 町田市民のお祭り

第12回市民協働フェスティバル「まちカフェ！」

<https://www.city.machida.tokyo.jp/community/shimin/machicafe2012.html>

町田市内のNPO法人や市民活動団体、地域活動団体(町内会・自治会)が一堂に集う！

- 日時:2018年12月2日(日) 10:00～16:00
- 会場:町田市役所1F～3Fの全館



「わりりい」の会は、下記で参加します

- ①ラオス山の民・モン族の手の込んだ刺繍小物を販売
- ②日中水墨協会会長・滿柏画伯による水墨画の体験
水墨画の年賀状に挑戦は如何？
◆申込みはなくとも大丈夫！
◆紙、筆、などの持ち物不要です。
◆体験時間帯 13:00～14:30/ 14:30～16:00
- ③「わりりい」関係者出版の書籍の販売



- ◆問合せ: ☎042-734-5100 'わりりい'
- 町田市役所 〒194-8520 東京都町田市森野2-2-22 ☎042-722-3111(代)

●世界の子供たちが描いた、多色刷りのとっても可愛らしいカレンダー

(公財) 日本国際連合協会 世界児童画カレンダー 2018

第19回カナガワビエンナーレ国際児童画展に応募(24,573点)選ばれた国際色豊かな児童画13点

- 1部1080円(税込・送料1～2部:450円/3部～5部:650円/6部以上無料)11月中旬より発送になりますので、下記12月の「わりりい」の活動に参加される皆様の方は、「わりりい」事務局で取りまとめ購入申し込みをします。申込期限:11月15日(木) (送料無料になるが、「わりりい」からの送付はしません) 申込み: Fax: 042-734-5100 Email: wanli@jcom.home.ne.jp

◆「わりりい」12月活動予定:

- ◆「2018まちカフェ」(町田市役所/12月2日)、「漢詩の会」、「ボイス・トレ講座」、「中国語勉強会」、12月定例会(12月7日/金)、

- ◆「わりりい」新年号 発送(12月28日/金)など

- カレンダーをご自分で購入の皆さんは、(公財)日本国際連合協会へ直接お申し込みください。 ☎03-622-6831 Fax03-6228-6832



◆「漢詩の会」と「ボイス・トレ」の案内は、10ページに掲載しました。

●「2018徐福の旅」日中平和友好条約締結40周年記念(映画)徐福～永遠の命を探して～

■【神奈川県開催スケジュール】

■日時:12月1日(土) 17:30 開場 18:00 開演

■会場:かながわ県民センターホール

<http://www.pref.kanagawa.jp/docs/u3x/cnt/f5681/hall.html>
(横浜駅西口徒歩5分 ヨドバシカメラ裏)

■料金:無料

連絡先: 神奈川徐福研究会 xufu@krd.biglobe.ne.jp
神奈川県日中友好協会 045-896-0124

◆予約は受付できません。満員の際はご容赦ください。

主演:板野 友美 黄 礼格
出演:段 文凝 佐藤 美希
白又 敦 小波津 亞麻
伊藤 かずえ
特別出演 王 珺

監督・脚本 ヨリコジュン



▶「わりりい」238号の主な目次◀

「寺子屋・四字成語」⑩开诚布公(私心なく誠意を尽くす)…2
 論語断片(41)「逝者如斯夫!」(逝く者は斯くの如きか!)…3
 五都市(上海・南通・揚州・鎮江・無錫)周遊(3)……………4
 東西文明の比較(29)「聖徳太子の一断面」……………6
 「漢詩の会」④『湖上に飲し、初め晴れて後雨る』…8
 『暁に浄慈寺を出づ』
 「わりりい」企画・陝北の旅 報告 I……………11
 サミラさんのイラスト館……………13
 海外出張の思い出・旧ソ連⑨……………14
 再びソウルへ(2018年10月3日～6日)……………16
 「わりりい」活動報告・インドネシア料理の会……………20
 お祖母さんの次粉(ツーフェン)……………22
 「わりりい」掲示板……………10、23、24

■11月定例会開催日及び12月号「わりりい」発送予定 ◆問合せ: ☎044-986-4195(わりりい)

- 定例会:11月11日(日) 13:30～ 三輪センター(町田市三輪緑山4丁目14-1)・第三会議室
※定例会は「わりりい」会員の皆さんはどなたでも参加できます。
- 12月号「わりりい」発送日:11月30日(金) 10:30～
- 場所:三輪センター 第三会議室 ※おたより発送日は弁当持参です。